

渴知より愛知へ

大内 力

You may take a horse to the water, but you can't make him drink. 馬を水辺につれてゆくことはできるが、水を飲ませることはできない、という諺は日本でも有名である。

この頃の多くの大学生をみていると、何となくこの諺を思い出す。かれらは水辺につれてこられた——自分で来たのかもしれないが、ただ世の中の慣習に従ってやって来たにすぎない馬である。もともと知識にたいする渴望がないのだから、水を飲もうとはしない。ただ水辺をうろうろしているだけである。しかし、いかに大学が立派な校舎を建て、すぐれた教授を用意しても、かれらに水を飲ませることはできようがない。

しかし、それも無理からぬことである。中流・保守意識の瀰漫している世の中で、一流大学に入ることが人生の唯一の目的のように育てられてきた子供には、知的渴望などというものは生れようがないであろう。

知的渴望は、今では社会人のものになっている。社会に出て職業をもって、その中で自分なりの人生を設計してゆこうとすれば、社会、歴史、自然などさまざまなことに疑問が生じ、今まで備えていた知識では解釈しきれないことが続出するのは当然のことである。知的渴望は、まず疑問をもつことから出発する。だが、みずから求め、みずから学ぶうちには、それは愛知740-774に変わるであろう。別に今すぐ役に立たなくてもいい、過去三千年、人類が営々と積み重ねてきた慧知、その一端にでもふれることの喜びを知るのがフィロソフィーである。

三輪学苑は渴えた馬のつどいである。そしてそこで水を飲んだ人はフィロソファーとしてそこから出ていってくれることを期待したい。

(東京大学名誉教授・経済学)

国際化時代の“教育摩擦”

中嶋嶺雄

このところ教育論議がひとしきり盛んになり、中曽根政権下に臨時教育審議会も発足して、様々な意見が交されている。教育論議は、国民が等しく各人各様の意見をもつものであり、私自身も教育の現場にいて、自分なりの意見をもっているつもりだが、どうもそうした論議にすすんで参画する気にはなれない。入試改善についてもしかりである。それは私自身が、これらの問題について、日々あまりにも現場での体験を余儀なくされていて、論議にふける気にはなれないということがあるからかもしれない。しかし、大学教師として日々そうした体験に臨んでいるというだけでなく、

私事にわたって恐縮だが、わが家では中学から高校までの男女4人の子供をもち、妻は公立中学校の教師で、連日連夜、非行中学生などに立ち合っている姿を見ていると、なんとなく世の教育論議が空々しく思えてもくるのだ。

ただ、今回は、飯田宗一郎氏という類稀れなる個性が、大学セミナー・ハウスという偉大な遺産に安住することなく、さらに三輪学苑という新しい教育の場を創造されつつあることに魅せられて、一点だけ強調したい問題を述べてみようと思う。

それは、わが国がいまや世界の責任ある国家として、いよいよ本格的な国際化時代を迎えつつあるといわれながら、いわゆる公教育における国際交流を考えると、わが国の教育界は、あまりにも閉鎖的で、日米関係においても、経済摩擦、貿易摩擦のみならず、“教育摩擦”が生じはじめているという事実についてである。日米間には、高等教育レベルではフルブライト奨学制度などが戦後存在し、高校生レベルの交流にかんしては、AFS(American Field Service)やYFU(Youth for Understanding)などがよく知られている。これらの民間教育交流のおかげで、わが国からは、これ



まで実に数多くの大学生や高校生がアメリカに留学し、多くの恩恵をこうむり、また多大な成果をあげてきている。

だが、こうした教育交流は、とりわけ、その効果が著しい高校生レベルの場合、日本からアメリカへという一方交通が依然として基本になっていて、アメリカその他の諸外国から日本へというチャネルは実に狭い。今日のわが国の国際的地位からしても、このような“安保ただ乗り”ならぬ“教育ただ乗り”の一方通行は一日も早く改善されねばならないのだが、いざ高校生を、わが国からの留学生同様に受け容れる高校を探すとすると、その数はごく少数である。とくに公立高校の現場はひどいもので、日本からの留学生は、アメリカの家庭にホームステイ、してその日から普通のアメリカ人同様に高校に通学し、場合によっては卒業証書までもらえるというのに、この逆のケースはきわめて難しいのが現状である。わが家を例にとると、高校三年生の長男は現在、アメリカのニュージャージー州の高校へ一年間AFS留学生で行っており、大変充実した高校生活を送らせてもらっている。高校一年生の長女も同様にAFS留学生として近く渡米することになっているので、そのお返しにもと思って、わが家には昨夏はYFUのアメリカ人高校生が、現在はAFS特別留学生で日本の大企業のモラル形成についてPhD論文を準備しているイギリス人がホームステイしている。

しかし、いずれの場合も、日本の高校や大学は、これらの留学生を日本人同様の学生として受け容れることに、きわめて消極的である。昨夏のYFU留学生の場合は、中曽根首相が就任直後の訪米で、アメリカ各州から上院議員推薦の優秀な高校生を2人ずつ、合計100名を受け容れると約束してきた日米友好の目玉商品のような学生たちで、彼らは日本に行けば、当然、ホームステイしている家庭の子供たちと一緒に高校で日本の高校生活を体験できると期待に胸をふくらませて来日したと

いうのに、東京都の多くの公立高校（とくに受験校）には、まったく受け容れの姿勢はなく、私自身痛く絶望したばかりか、折角の留学生を大いに失望させた経験がある。文部省も総論はともかく、実際にそのあたりの指導をきめ細かくやっているとは思えず、しかも高校側は、そんな面倒な余計なお世話はまっぴらで、アメリカ人高校生のために授業が遅れてもしたら、入試にもさしつかえるといった様子なのである。つまり、いくら日米友好、ひいては日米間の経済摩擦解消の一助にもと思って政府間で外交ショーとしてのアメリカ高校生100名受け容れを大々的に宣伝したとしても、肝心の受け皿がまったく出来ていないのが実状である。

国公立の大学や高校は、国民のものなのである



から、わが国の国際化のためにも、留学生の受け容れなどは法制化すべきだと思うのだが、現状は“教育の自治”の壁にはばまれて、程遠いものがある。私はむしろ私学や民間の教育機関に期待する以外ないと絶望しているのだが、それだけに飯田宗一郎氏の主宰する三輪学苑が、そのような留学生にとっても開放されたら、さらに素晴らしい成果を生むのではないかと大いに期待している。（東京外国語大学教授・国際関係論・現代中国学）

倫敦漱石記念館開館式に出席して

熊坂敦子

昨年8月24日、未だ明けやらぬ朝、ヒースロー飛行場に降り立った。暑い中にも爽やかな風が立って、英国は初秋のようであった。空港では倫敦漱石記念館館長恒松郁生氏が、出迎えてくれた。

その夜、記念館開館式に先立って特別記念講演会が行なわれることになっていた。国際交流基金の肝入りで、パークレーン・ホテルで催された。参会者の寡少が予想されたが、ロンドン大学、大使館、国立図書館関係の英国人を交え、日本の大学研究者も来英して、80名位が集まった。午後6